

教会と浅間山

藤井 聡

小泉総理は、郵政民営化の是非を国民に問うと叫びつつ「断行」した解散総選挙にて大勝した。国会は国政全般の議論をなす場であり、かつ、国政選挙は国会議員を選出する場なのだと、いう当然の基本的了解が日本国民において存在していたのなら、小泉自民党が大勝することなどあり得なかつたであろう。どうやら、日本国民は、自らには国政の細部の是非を判断する能力が備わっていると自認しているようである。しかも、国政選挙を個々の政策についての国民投票の場であるとも考えているようである。この点を鑑みるだけで、日本の大衆社会化はほぼ完成し、我が国の国土のそれぞれの地域に根付く「庶民」があらかた消え失せた様子が見取れる。

こうした大衆化の流れは、近年特に激しいものとなっていることは間違いないだろう。しかしそれは決して、失われた10年やバブル期や高度成長期等といった、ここ数十年の日本の現代史の中で唐突に出てきたものではないようである。

カルメン故郷に帰る

我が国最初のカラー映画は、戦後6年目にあたる1951年に公開された「カルメン故郷に帰る」という木下恵介の作品である。この映画は、浅間山の麓の小さな山村から「おきん」という娘が家出をし、東京で「カルメン」なるストリッパーになった後に、ストリッパーの友人一人を連れて、錦を飾りに故郷に帰ってくる、というストーリーの「コメディ映画」である。山村に住む父親は、出て行った娘との再会に喜びを禁じ得ないものの、決して娘を歓迎しようとはしない。しかし、村の人々はおきん達に対しておおむね好意的である。女達は派手な洋服に見とれ、男達は洋服の隙間からかいま見える素肌に見とれ、子供達はものめずらしさからおきん達の後をついて回る。その中でも特におきん達を好意的に迎えたのが「丸十」なる村一番の実業家であった。丸十はこの奇抜な来訪者達に、東京で日々踊っているストリップダンスをこの村でも踊って見せなかと持ちかける。ストリップが「芸術」であると言ってははからない彼女たちは、この申し出を快く承する。それを伝え聞いた、笠智衆扮する村の小学校の校長先生は、ストリップ興行を中止すべく父親と共に丸十のもとに向かう。しかし、その申し出は受け入れられない。致し方なく校長と父親は、おきんのもとに向かう。しかしその道

の途中、父親は校長に「もついい！」と叫ぶ。「東京の真ん中でやって許されていることが、この村でやってだめな理由なんかねえ」この叫びに、校長も納得してしまふ。そして校長は「う言つ、浅間山が何もかもこ存じだ。今日は家で飲もう」。かくしてその夜、おきんは「カルメン」として自らの肌を村人にさらし、校長と父親は傷を舐めあつように酒を酌み交わす。そして次の日、おきん達は、東京の日常に戻れることに安堵の表情を浮かべ、友人とはしゃぎながら東京に汽車で帰っていく。

救いようのない話である。

法的には「東京の真ん中でやって許されていることが、この村でやってだめな理由」などありはしない。しかし、法律以外の規範があればこそ社会が成り立っていることなど、改めてここで指摘するまでもない。校長は丸十をとめられたはずであるし、父親もおきんをとめられたはずである。しかし、校長も父親もその行使可能な権力を行使しなかつた。拝金主義の商売人と、素肌をさらす事だけが売りの興行と芸術との区別も付かない小娘の言いがままにさせたのであった。代わりに彼らがやったことは、自棄（やけ）酒だったのだ。

この映画は、小学校の校庭にて子供達が浅間山を背景にお遊戯をするシーンで幕を閉じる。そのシーンに監督が込めたメッセージは、おき

ん騒動があつた後でもなお、山村には昔ながらの美しい風景があり、美しい人々が住み続けている、というものであろう。しかし、東京から汽車でやって来たおきん達は、その山村に都会の夜の空気を運び、それによって山村がわずかではあつても着実に変質してしまつたことは間違いない。女達は山村にはない「きらびやかさ」を、男達は山村にはない「刺激」を、商売人は山村にはない「新しい商売の可能性」を、それぞれおきんとその背後の都会の影の中に見たのであつた。

この映画が昭和26年に公開された映画なのである点を踏まえるなら、この映画に象徴されるのが、高度成長期などよりもずっと以前から存在していた様子が見て取れる。そして、昭和26年といえは敗戦直後といえる時期である以上、戦前においてすらそつした風潮が日本の底流の一つとして存在していたことが容易に察せられる。地方の人達は都会にある種の憧れを抱き、その憧れに駆られて地方を飛び出した若者達が都会の空気を携えそれを「錦」と称して戻ってくる。無論戦後地方に持ち帰られた「錦」の中には、立派なものも多数あつたことである。しかし、カルメンが東京から浅間山の麓まで運んできたような「裸踊りの錦」もあつたこともまた間違ひなからう。無論、その数が限られたものであつた頃なら、この映画のラストシ

ーンにて暗示されたように、地域の風土も地域の庶民もおおよそ変わらぬ形で保守されるということもあり得るだろう。しかし、カルメンは次のカルメンを生み、地域の風土の弱体化を促進し、その地に自生する庶民を少しずつ奪い取っていくことは避けがたい事実であろう。

こつした日本人における近代的・都会的なるものへの安易な憧れが、拡大し、いきついたのが現代の風潮なのである。盲頭にて触れた小泉自民党の先の総選挙での大勝も、その風潮の一つの現れである。この度の総選挙に出馬した候補者達は、さながらおだてられてストリップ小屋の舞台にのぼつたストリップ嬢なのであり、投票に向かつた国民達は、そのストリップ嬢にむらがる村人達なのだといつても決して過言ではないのである。

教会と浅間山

我々は、このストリップ騒動に象徴される風潮にあらがう術を持つのだろうか。その鍵の一つは、空智衆がストリップ興行中止を断念した時に発した、次の一言に隠されているように思える。

「浅間山が何もかもこ存じだ」

この山村に生まれ育つた者は、毎朝毎夕、浅間山を眺めてきたのであろう。そして、いつしか、不動なるものの象徴として、人智を超えた

るものの象徴として、浅間山を捉えるようになったに違ひない。筆者も生駒山という奈良県と大阪府の境にある山の麓で育つた。こちらのいかなる変化にも関わらず生駒の山はそこにあつた。今帰つても山はそこにあるだろうし、自分が生まれる前からそこにあつたことも、自分がこの世から消えた後にも山がそこにあることも容易に想像が付く。山は自分にとって、自分を超えたものごとくに思いを馳せるための重要な契機となつていた様に思えてならない。

無論、それは、山でなくても良い。

ドイツにフライブルグという人口20万人程度の小さな街がある。この街は我が国の都市計画者の間では最も有名な街の一つである。この小さな街が都市計画者の間で有名なのは、都心から自動車排除することに成功したためである。

自動車がこの世に誕生して以来、多くの街は自動車の流入によつてどんどん寂れていった。それは、おきん達が伝統的山村に、「近代」を運んで来たように、自動車が伝統的都心に、「近代」を運んで来たためであつた。自動車の流入によつて小さな商店は大きな打撃を受けた。歩行者はゆつくりと商品を見てまわり買い物をする一方で、自動車運転者は商店街の品など見て回らない。それ故、自動車の運転者を客とみなした商人達は、駐車場の広い土地に新店し始めた。

その結果、商業は郊外化し、都心部は空洞化した。こうして、自動車社会の進展は、都市の空洞化をもたらした。現在、日本の各都市の商店街を一つずつみてまわつてみるとよく分かるはずだ。大半の商店街が「シャッター街」と揶揄されるほどに寂れきっている。

この反省のもと、都市計画者の間では、街の活力を取り戻す重要な術として都心からの自動車の締め出しが議論されることがしばしばある。しかし、一旦近代化した山村が容易には元に戻らないように、一旦活力を失った都市が活力を取り戻すことは容易ではない。失った活力は、自動車を閉め出しただけでは元には戻り得ない。しかし、フライブルグという街は、それをやってのけた。1970年代に自動車の流入規制により、確かに街は活力を取り戻し、まちなかを歩く人々は一頃の何倍にも増えたのである。

なぜ、フライブルグにはそれができたのか。その理由は、その街を訪れた時に分かったよ。うな気がした。この街を訪れた誰もが気付くのが、街の中心にある大きな教会である。この教会は、フライブルグの横にあるシュバルツバルトの山に匹敵する程に高い。14世紀に建てられたこの教会は、この地に暮らす人にとっては、筆者にとつての生駒の山のような存在であつたに違いない。人智を超えた不動の存在として、立ちただかつていたに違いない。フライブルグの

人達は、そつした存在を、街の外にあるシュバルツバルトの山に求めるだけでなく、街の中に、それも街の中心に教会という形で据えたのである。その教会を中心とした広場には、野菜や果物を売る屋台が並び、その外側に歴史的な町並みが広がる。そして、それを取り囲むように、自動車道路が整備されている。さながら、教会なる前近代的なるものの威光によつて、より象徴的に述べるならキリスト教の神の威光によつて、自動車という近代的なるものの進いが阻止されているかのようである。

つまり、フライブルグにおいて自動車の流入の規制に成功したのは、教会に象徴される前近代的なるものが残されていたからなのである。無論、その教会がそれだけの効果を發揮し得たのは、その「高さ」「大きさ」に象徴される物理的な偉大さがあつたからである。しかし、そつした物理的なもの以上に重要なのは、言つまでもなく、その地に根付く伝統から析出される「意味」なのである。

それは決して、浅間山にしても、生駒山にしても例外ではない。

山を物理的に解釈することを試みるのなら、徹頭徹尾、物理的存在として解釈することは容易い。しかし、それでもなお、我々は、その物理的な山に種々の意味を付与することができる。そつ考えるのなら、浅間山も、生駒山も、フ

イブルグの教会も、大きく変わるものではない。小泉自民党の大勝に象徴される現代において、それにあらがう象徴としての「山」や「教会」は、消え失せたのだろうか。

そつなのかもしれない。しかし完全に消え失せたとも言い難いのかも

しれない。だとするならば、我々は、カルメンの父親や校長が貫いた沈黙の愚を繰り返してはならない。ひとり一人の帰郷者、一台一台の自動車が運ぶ「近代」は、微々たるものであつたとしても、その積み重ねが山村や田園や都市の風土を崩壊させたのであつた。そつであればこそ、その回復において、もつとつと積み重ねていく同様の過程を経ねばならぬのである。こつ考えるのなら、座して死を待つ愚を避けることは、現代人においても決して不可能なことではないのである。